

# 技術革命と環境問題の相互関連について

小金 芳弘 (こがね よしひろ／元経済企画庁国民生活局長)

環境保全の運動にとって一つの難関は、現代の生活に不可欠な産業技術が大量のエネルギーを自然から抽出して投入する性質を持つことであり、規制の強化や禁欲主義の復活はそれに対する対策にはならないので、どうしても技術革命が必要になる。その一つの方法は、自然のエネルギーを遥かに効率よく利用するための方法を持っているに違いない生物に学ぶ生物技術を使うことである。こう思っていた私は今年の2月、EM (Effective Microorganisms) 一有用微生物群一という生物技術の製品が30年以上も前の日本で琉球大学比嘉照夫教授によって開発され、世界の150もの国で使われていることを知った。

衝撃的だったのは、それが通常的环境汚染に対してだけでなく、放射能による汚染に対する武器としても有力だということで、もしそれが事実なら、今の日本にとってこの上もない朗報であるのに、全国紙やテレビなどのマスコミは一切報道していない。何故か、という疑問に対する私なりの解答と意見は「小金芳弘のホームページ」の「EMセミナーに参加して」の中で詳しく述べているが、簡単に言うと以下ようになる。

EMの持つ能力が、比嘉教授とそれを支持している30万もの人たちの言う通りだとすると、それが普及することは日本の一般国民にとって大きな利益になるが、反面非常な不利益を被る人たちもいる。汚染の原因になっているものを大量に生産して大きな利益を得ている企業や、対策のための研究開発を目的として巨額の政府援助を得ている機関にとっては、EMが普及すればその大部分が不要になってし

まうからである。EMにそんな能力があるという主張には科学的な根拠がないという批判は、主にここから出てくる。

両者の言い分を公平に報道しようとする、一方は大部分が「素人」だが、EMを実際を使用してその体験を持っているのに対して、他方は、各種の分野の専門家ではあっても実際に汚染を処理したことがなく、抽象的な意見を言うだけなので議論がかみ合わず、結果的にEMの宣伝になってしまう場合が多い。そこで、科学的な根拠のない情報を流すことは無用の混乱を招くので差し控える、ということになった。

確かにEMは教授自身が認めるように、微生物学や原子物理学の理論にもとづいて実験を重ねた結果生まれたものではなく、農薬や化学肥料に替わるものとして考えられたものが、いくつかの偶然と試行錯誤にもとづいて出来上がったものである。しかし歴史上の偉大な発明・発見はほとんどすべて、これと同じようにして生まれたのであって、既存の科学では説明できないからと言って捨てていたら、技術革命も科学の進歩もなかったであろう。

今の日本には、口では立派なことを言っても肚の中では、金儲けや政府の援助を得ることだけを考えている人が沢山いるが、その一方では、金儲けのための強力な武器になる商品を持ちながら、地球環境を救うためだけにそれを使おうとしている人と、それを支持する多数のボランティアもいる。私がこれを書いたのは、同じ目的のために活動している人たちにそれを知ってもらいたいからである。